

Title	フイエルバッハの死の思索
Author(s)	喜多, 隆子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1982, 15, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7173
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フオイエルバッハの死の思索

喜 多 隆 子

フオイエルバッハは、ヨーロッパの近代の「個体の不死に対する信仰」(der Glaube an die Unsterblichkeit des Individuums)を批判することを通して、独自の死の思索を展開させた。

フオイエルバッハは、個体の不死に対する信仰を持つ観念論を批判し、地上における個体の感性的時間的な死を対置する。しかし、個体の感性的時間的な死を、死の根柢とみなす唯物論にも与しなかった。

フオイエルバッハは、両者が、「死の深所」(die Tiefe des Todes)を直視していないと考えるのである。

彼の見解によれば、個体の感性的時間的な死は、地上における「人間の純粹な普遍的本質」(das reine allgemeine Wesen des Menschen)の無限性と永遠性の「顯示」(die Offenbarung)なのである。人間の純粹な普遍的本質とは、「類」(die Gattung)「人類性」(die Menschheit)「精神」(der Geist)である。

フオイエルバッハは、我々に死の克服への道を明らかにする。すなわちそれは、死の真理を知ることであり、死の意義を承認することである。その後、フオイエルバッハは、不死とは何かを問い返すのである。

従って、個体の不死に対する信仰へのフオイエルバッハの批判から考察しなければならない。

個体の不死に対する信仰は、個体の死後の彼岸における個体的永続に対する信仰を意味している。この信仰においては、地上における死は「仮死」(ein Scheintod)としかみなされない。すなわち、近代的主観は、仮死を通して、自己の、「無限定的無限な」(unbestimmt unendlich)絶対性を空想的表象によつて獲得しようとする。それゆえ、彼の主観の中で、地上の生活が非真実なものとなり、彼岸の生活が真実なものとなるという転倒が「仮象」(ein Schein)として生じてくるのである。

個体の死後の個体的永続という彼岸の生活は、およそ次のように要約されよう。すなわち、天体の諸星辰における肉体の復活と浄化、あるいは魂の不死による永遠の享受である。しかし、フォイエルバッハによれば、死者の滞在地としての諸星辰は、死者が生者を圧迫することのない利益を持つ地方として願望され想像されている。また肉体の復活と浄化とは、繊細で柔軟な軽い肉体として願望され想像されている。あるいは、魂の不死は、あらゆる物質から解放された透明で純粹な魂による永遠の歡喜、快樂の享受として願望され想像されている。

フォイエルバッハは、主観の空想的表象による個体の死後の個体的永続という生活が、地上のあらゆる規定、制限、限界を取り去ることによつて無制限に拡大され「持続」(eine Fortdauer)された生活であることを、批判する。それゆえ、彼は「不死信仰の觀念論」(der Idealismus des Immortalitätsglaubens)に対し、地上における個体の規定、制限と限界および、個体の感性的時間的な死を描出することによつて反論する。

「地上でのみ存在すること、自然が地上の形式と形態において持っている制限の中でのみ可能的且つ現実的に存在することが、人間の生そのものの本質である。」⁽¹⁾個体は、ただ時間的・空間的に規定された存在者として肉体的に生きている存在者である。そして、このことは、同時に個体の限界でもある。特定の特異な個体は死と共に消失す

る。また肉体は有機的肉体として魂と引きさかれえない統一体である。それゆえ、特定の特殊な個体と共に特定の特殊な魂も同時に消失する。しかし、個人は生きている存在者として、自分の「現存在」(Dasein)の確実性をただ感覚の中に持つ。個人にとっては自己は他の個人から区別されたこの個人として感覚される。感覚の中で、始めて個人の現存在が意味を持つ。そして感覚からは時間が分離されえない。私が感覚するのは、ただこの消滅する今、「この無常な瞬間」(dieser vergängliche Augenblick)の中で感覚することによってである。人々は、時間をただ長さの次元において、流れつづける中断されない線として表象する。それに対して「私が感覚するのは、私がいればそれ自体において同一のそして中断されない時間の流れから瞬間という真珠を切り離し、そして瞬間という狭い空間の中に私の存在を集中し閉じこめることによってだけではない。」個人は、常に限定されたものだけを感じる。というのは、「この限定された感情」(dieses bestimmte Gefühl)の中に常に個人の全存在が含まれているからである。私を感じるのには、私の個別的な限定された全存在が今という瞬間に集中し、現前し、統一されることによってである。その意味で、感覚とは、個人的な自己意識ともいえる。すなわち、瞬間においてのみ自己と一致する自己意識である。いいかえれば、個人の感覚においては、いかなる持続的な享受も存在しない。現実的感覚的な享受は、時間の規定による中断、消失が存在するところのみ存在する。そして、個人は感性的時間的存在者として消失する。

このように、フォイエルバッハによって、個体の死後の個体的永続、感性的美的な肉体の復活と浄化、純粹な魂による永遠の歓喜、快樂の持続は、現実にはありえないことが明らかにされた。

ところで、フォイエルバッハは、不死信仰の観念論を批判したが、個体の感性的時間的な死を死の根拠とみなす

ような唯物論にも与さなかった。唯物論・経験論・自然主義者にとって、個体の時間・空間・生命は、死の根拠である。それに対し、観念論は、個体の死後の個体的永続を主張することによって唯物論に対抗しているかのようにみえる。しかしながら観念論も地上の感性的時間的な個体の消失を、個体の限界とみなす点で唯物論と変わらない。すなわち、観念論は、地上のあらゆる規定や制限・限界を取り去って、無限者を表象しようとするからである。フオイエルバッハは、唯物論も観念論も死の深所を直視していないと批判する。

それに対してフオイエルバッハは、地上における個体の感性的時間的な死に、人間の純粹な普遍的本質、すなわち、類・人類性・精神の顕示を見出すのである。そしてこの本質は、普遍的・無限的・永遠であるとみなすのである。既述のように、個体の死後の個体的永続という表象における存在は、無限定的無限な存在である。また地上における個体の感性的時間的な死は、「被限定的有限な」(bestimmt endlich) 存在者を示している。フオイエルバッハは、人間が意識することによって、自己の死を「被限定的無限な」(bestimmt unendlich) 存在者の死とみなすことができると考えるのである。

ところで、個人は、自己を特殊な個体として意識する。主観的な現存在の意識からみれば、個体の死は、「最も恐しい生の空所」(die ensatzlichste Lebensleere) 「最も純粹な荒野」(die reinste Wüste) である。個人にとって、この存在者が、この存在者であるのはこの地上で「一度」(Einmal) だけである。そして「今度」(dieses Mal) だけである。この存在者の代りに生まれる他の新しい存在者は、この存在者による「空虚な」(leer) 場所を充実させるのではない。もし、新しい存在者が、この存在者の存在していた場所を充実するとしたら、新しい存在者は逝ってしまった存在者と全く同じものでなければならなかったろう。主観的な現存在にとって、この存在者

の死は、この存在者が決して再び返ってこないで永遠に逝ってしまうと意識されるのである。

フォイエエルバッハは、この主観的な現存在の意識を特殊な意識であると指摘する。そして、この意識を人類の意識と区別されなければならないと主張する。本来、個人が自己を特殊な個体として意識するのは、人間の純粹な普遍的な性質、すなわち類・人類性・精神が対象となつていたのである。個人が意識している対象は、確かに個別者であり、特殊者である。それに対して、意識そのものは、端的に普遍的である。特定の個人は消失する。しかし、それは人類の意識の客観であるからにすぎない。ただ、主観的現存在だけが一人存在し、人類の意識の客観が存在しなければ、あらゆる事物が無限であり、永遠であつたであろう。個人が死ぬのは、個人が、人類の意識の対象であるからである。個人が死ぬのは、「対象化するという内的行為」(das innere Thun des Gegenständlichen)が、自己をまた人類の意識の対象として、客観として、自然の中で表現することが出来るからである。逆にいえば、個人が死ぬのは、人間が、自然からの自己区別を自発的に把握しうる精神的存在者であるからである。そしてこのことは、個人が、自己を個別的感性的な現存在から区別するもの、すなわち、類・人類性・精神という本質を自己自身の中に持つていることによる。

フォイエエルバッハは、死を主観性の中から歩み出る行為であると指摘する。個人は、自己自身を内面的に自己の本質から区別するのと同様に、外面的感性的現存在の方からみても、自分の本質と分離されなければならない。個人が死ぬのは、自由な存在者、思惟する存在者、意識する存在者であるからである。死は感性的な終末として、ただ精神的本質的な終末の現象にすぎない。「いかなる精神もいかなる自由もいかなる内的自然も存在しないところには、いかなる死も存在していない」というのは、³⁾いかなる内的区別も存在も存在していないところには、い

なる自由も存在せず、またいかなる区別も存在しないところには、いかなる死も存在しないからである。

フオイエルバッハはこのような個別的感性的な死の深所を見つめ、自己をあますところなく「放棄する」(aufgeben)ことが、死の克服と結びつくとして主張している。この主張には、神を自己の絶対性、自我性として反映したり措定したり、自己の不死性を表象するところの近代的主観への痛烈な批判の意図が込められていたのである。

しかし、既述のように、フオイエルバッハは、個人を、唯物論の立場におけるように限定的有限な存在者とみなしたのでなく、不死信仰の観念論におけるような無限定的無限な存在者とみなしたのでない。個人は、自己否定を介して無限なものを宿しうる有限な存在者、被限定的な無限な存在者と考えられているのである。

地上そのものも、伊達四郎氏の指摘されるように、「被限定的⁽⁴⁾無限的」ととらえられて具体的にたろう。「地上は確かに限定された、しかし何ら有限的に限定されたのではなく、その被限定性において同時に普遍的、無限的な、内容に富んだ、すなわち自己自身の中に最も多様な、種類・区別・対立を許し含む尺度である。」⁽⁵⁾

通常、人々は、無限者を表象する時、自己の制限・限界・規定を否定しなければならぬという認識を持つ。人は、ここに存在していることと、そこに存在していることと、今存在していることと、いつか存在していることと、このものであることと、あのものであることを捨象して無限者の認識に迫ろうとする。しかし、フオイエルバッハによれば、ただ有限者を否定することを介して無限者に迫るという必然性は、その根柢を個人が自己の中に持っているのではない。対象そのもの、類の無限性の中に持っているのである。いいかえれば、個人が無限者の思想に到達するために、有限者を否定して有限者を捨象しなければならぬという認識を持つのは、ただ無限者である類そのものが有限者の否定であることを意味する。それゆえ、個人が個人の中で無限者の表象を産出しようとする

る抽象活動は、無限者が行っている模倣にすぎないということになる。有限者の「虚しさ」(die Nichtigkeit)有限者の死は、有限者が有限者として措定されていることの現われとして現実である。そして、有限者の虚しさ、有限者の死は、無限者の現実的存在、類を示すのである。

地上の自然の中で、類は、有限な「無常な」(vergänglich) 個体に対する関係において、普遍的であり無限である。諸個体が実際に有限であり、交代し、変化し、消失するということは、類という無限者の現実的存在に基づく。諸個体は死という等しい否定に出会う。死は、諸個体の共通の運命である。

しかし、「無限な何物をも自己に宿さないものは、死ぬことができなかつただろう。」⁽⁶⁾ 個体の死において、類は顕わになる。というのは、類は、個体が消失する間に持続しているからである。そして個体も本来は形式の方からみて消失するのではない。たとえ、一定の時に発生し生きている類に属する数え切れないほどの個体が消失したとしても、常に新しい個体が成長してくる。このように、個体の感性的時間的な死の深所から、類の無限性だけでなく、類の無限性に限定された無限なものを宿す個体の有限性が顕わとなってくる。

フォイエルバッハは、死の真理を知り、自己の死を余すところなく放棄することが、死の克服の道であると考えていた。しかし死は死以前に克服されて初めてその意味を持つと思われる。

それ故、次に我々は、フォイエルバッハによって示される、死の深所をさらに直視してみよう。フォイエルバッハは、有限者として措定されることの虚しさ、有限者の無常性を、真に直観していたと思う。無限者である類が自己の本質であり、自己の死という自己否定、自己放棄によって持続すると意識しても、個人は滅ぶ。フォイエルバッハは、その意味で、死の深淵を「無」(Nichts)と、とらえていたと思う。その中から湧き上ってくるのが、愛

という人間の本質であつたと思う。我々は、フォイエルバッハの哲学が残した多くの余韻の一つとして愛の共同体の思想を挙げることができよう。しかし、その中に、個人の虚しさ、無常性、無といったフォイエルバッハにおける否定的なものを理解しない限り、甘く空疎な余韻として消失してしまふと思う。彼岸における不死信仰を拒否し、不死と永遠を保証する神の前での「克己」(Selbsterleugnung)を「遊戯」であると看取し批判したフォイエルバッハにとつて、死はまさに「無」であつた。このことは、フォイエルバッハが非合理主義者であるということ在意味するのではない。むしろ、フォイエルバッハが、死・無という問題にいかに深く係り、対決したかが示されていると思う。そして、フォイエルバッハは、自己の内なる可滅的で有限な現存在と不滅的で無限な類という本質との分裂の統一を、他者を介して計ろうとしたと思う。

「単独者」(ein Einzeler)がいることと、多くの単独者がいることとは同じことである。私が他者を直観するならば、他者の中に、私自身の分裂を再び発見することができる。というのは、他者は、神ではなく、自己と同類であるからである。

実際、「対自存在」(Fürsichsein)あるいは「孤立存在」(Isolierung)として人間が「自己自身のために」(für sich selbst)存在することは、不可能である。もし、人間が充たされない単なる孤立存在および自己に耐えうるなら無に耐えうることできたであろう。そして、人間が愛さないうで、ただ自分のために存在しているならば単に、純粹に自然的な存在者にすぎず、媒介されない存在者にすぎない。そのような人間であるのが不可能であるのと同様に、社会によって接触もされず墮落もさせられない人間であることも人間には不可能である。そして、人間が他者を憎悪したり激情を持たない人間であることも不可能であろう。個人は、自己分裂の意識、すなわち無

限な類と、有限な個体との分裂の意識を、他者と係わることによって、他者を愛することによって、解消しようとすると思われる。真実の人間の自己における最も内面的なものは、他の自己であり、個人の有限性が解消されうる無限な対象である。また、自己の内なる不純な現存在と、純粹な人間の本質との分裂の意識は、他者を尊敬し愛することを介して浄化されるかもしれない。しかし、この分裂のあますところのない統一は不可能であると思う。すなわち、個人は自己の現存在において、絶えず、無常性・不純さ・有限性への感情と意識へと転落するのではないかという疑問が生じるからである。それに対してフョイエルバッハは、個人の現存在における無常性・有限性を認める。しかし、個人が愛することによって自己の虚しさを説明し、承認し、否認しようとしていると考えるのである。そして、あらゆる意味での愛は「自己犠牲」(Selbstopferung)を意味している。あるいは「自己放棄」(Selbstaufgebung)を意味している。それゆえ、フョイエルバッハは、真実の生活は「中断されない犠牲祭」であると主張する。すなわち、個人は時間の中での無常な中断を、他者に対する愛による自己犠牲によって否認し、克服しようとするのである。しかし、既述のように、現実には個人における他者を介しての自己分裂の統一が余すところなくないえないのと同様に、個人の無常性は愛によっても克服しえないと思う。それにもかかわらず、個人が自己犠牲を払って他者を愛さなければならないのは、死が個人に共通の運命であるからであると思われる。もし、個人が死によって、限定もされず、無限であり、永遠であり、完全であるなら、他者への自己犠牲としての愛は存在しなかったであろう。逆にいえば「いかなる死も存在しなかったら、愛は完全ではなかったらう。」⁷¹

存在は「共同体」(die Gemeinschaft)であり、孤立存在は、非共同的である。そして無は世界に存在しているものの中で最も非共同的である。個人が無であり、そして無になるのは、愛している他者との結合を拒否する瞬

間である。死はそれゆえ、個人がただ他者の中で、他者と共に、他者のために存在することができるにすぎないということの承認である。すなわち、死は、人間的本質である「愛の顯示」(die Offenbarung der Liebe)である。このように、フォイエルバッハは、死が死の前に克服されうると主張するのである。

フォイエルバッハは、死が死後に初めて克服しうるとみなす道徳を、最もむなししい道徳であると批判する。死が克服されるのは、既述のように、死の真理を理解し、死の意義を深く「直観し」(anschauen)承認することである。消極的にいえば、死が克服されるのは、自己を真実に余すところなく放棄することによってでしかない。死を克服する人は、死の中に自分自身の意志を承認する。それ故、死は自然死の中で初めて始まるのではなく、自然死の中で死に結末を与え終ることによって真実の死となる。最初の人間は、かつて死をこの世にもたらした。今もお、毎日死がこの世にもたらされていることを、我々は承認しなければならない。

さて、フォイエルバッハは、歴史における個人の死の意義を明らかにし、死の克服への最後の道を示した。

フォイエルバッハは、個人が、自己の個体の死後になお「多くの人々」(viele andere Menschen)が残ることを信じなければならぬと主張する。そして、個人の死を、人類の精神を他の人々へ伝える最後の言葉であると意義づけた。

フォイエルバッハによれば、人類の精神、意識そのものは永遠であり無限であり不滅である。人間は、単独者として、一つの全体である人類の中へ入っていく。しかし、個人が、自己自身を意識するのは、ただ他の人々の中で、他の人々によってである。いいかえれば、個人が自己自身を他の人々から区別するためには、他の人々が必要である。また逆に、他の人々は、個人の内面的な生活の中へ深く織り込まれている。それゆえ、自己自身に関する個人

の知は、彼に関する他の人々の知によって「媒介された知」(vermitteltes Wissen)である。個人に関する他の人々の知は、個人自身の知になり、外面的意識は、内面的意識になる。あらゆる人間の分ち難い相互的な直観が一緒となり一つの知となったものが、初めて意識なのである。そして、個人の区別作用のために他の人々が必要とされるという必然性は、意識があらゆる人間の無限な統一性であることの現象である。同様に、個人の意識が他者によって媒介されるといふ必然性は、意識が無限な統一性であることの現象である。そして、死は、個人が個人の意識を再び他の人々に返し、引き渡す行為である。個人の意識、知は、死の際に出ていく。

個人は生れる前に一度無であった。そして、人類の永久に完結した意識、自己の内部で常に自己を發展させ自己を創造する意識の中で、人格として成長し、成熟する。個人は死の際に、無の永久の眠り、没意識的な休息につく。死において個人の全生活は中断されない想起過程となる。個人のおおよび個人自身が、彼の全生活が消滅すると一緒に消滅する。こうして、時間は、存在から本質への移行を形成する。想起された存在は、まさに精神の客観として、他の人々の客観となる。個人は、死の中に、精神的過程における活動の顕示と完結を認識する。個人の全存在は、最後に観念的な存在として浄化される。そこでは、個人が、現実的な人格、激情や憎悪の客観であるような存在ではなく、表象された人格・単なる表象の客観となる。すなわち、個人は、ただ伝達されたにすぎないもの、ただ伝達することができにすぎないもの、言葉、名前になり終結する。個人が生きているのは、ただ個人が、伝達すべき或るものを持つている限りだけである。もし、個人があらゆるものを伝達してしまったならば、個人は、自己自身を「放棄する」(hingeben)のである。「」の放棄」(diese Hingebung)が死である。死において、個人は自己自身を全体的に言表し、他の人々に最後の言葉を吹き込むのである。このように、死が個人の

「最後の伝達行為」(der letzte Act der Mittheilung)の意義を持つことが明らかとなった。

ところで、フォイエルバッハは、個体が人類の歴史全体によって規定されている故に、生が「真剣」(Ernst)となることを次のように示している。

フォイエルバッハは、個人の生活を、精神活動によって中断されない想起過程ととらえたのと同様に、人類の歴史を中断されない想起過程と、とらえる。人類は統一体であり、諸個体を自己の中に解消させる統一体である。歴史は、この統一体が時間の中で現象したものである。意識の中の永遠性、過去と現在と未来の統一性は、歴史の内の根柢であり地盤である。人類は、歴史の諸分枝、諸個体の不断の運動の中で、中断されない革新、創成、転化の中で理解される。しかし、一つの全体としての歴史そのものは、時間を超越している。意識は、歴史的な諸変化の中にあつて変ることなく確立している現在である。そして、人類が不断の活動、運動、発展の中に存在するのは、あらゆる民族、個体を照らし、結合し、抱括するところのこの意識の統一性の内部で、である。個体の「歴史的実存」(die geschichtliche Existenz)は、歴史的全体における目的によって規定された実存である。個体の規定性は、個体の中で「衝動」(Trieb)「欲望」(Verlangen)「本能」(Talent)「傾向」(Neigung)として顕わになる。個体の規定は、それゆえ彼の生活の原理として使命である。或ることに對する個体の能力は、個体がそれによって生きている能力である。もし或ることに對する個体の能力が使用され、実現されるならば、生きる能力も消費されたのである。個人の規定は、個人の内的目標、生活の目標である。個人の規定は、個人の現存在の「端初」(der Anfang)であり「完結」(der Schluss)である。そして、自己に死という限界と目標をおくことによつて、人間の精神は集中し、生は真剣となる。

フォイエエルバッハは以上のように、死の思索を通して、個体の死後の無制限な永続、規定も限界も目標も持たない生活を仮定し、願望し、想像することを、批判したといえよう。こうして、彼岸の生活が、精神集中も真剣さも持たず遊戯と「虚飾」のための生活であることが明らかとなった。彼岸における永生に対する個人の信仰は、所詮、時間的な生命に対する信仰である。時間的なものが永遠であり、可滅的なものが不滅であり、限定された人格が絶対的な存続を持つ生活は、時間的な有限な生活にすぎない。それに対して、この世の生活こそ無限な永遠な生活である。

しかし、個人の現存在の無常性・有限性はあますところなく回復されえないと思われる。すなわち個人の存在は、ただ或る瞬間の現在に制限されているからである。個人は常に現在に、この瞬間に存在する限りだけ、存在している。過去は、たとえ個人の想起の中に生きていても、もはや存在ではない。存在は、常にただ瞬間の存在が消滅すると同時に消滅する瞬間の現在である。

それに対して、フォイエエルバッハは、不死とは何か、を問い返したと思う。不死とは、個人が長く生きたかが問題ではなくかに生きたかが問題である。不死とは、「或るものである」(Etwassein)ということである。或るものであるとは、内容に充ちている生命を指す。生命の各瞬間は、充実された存在であることよって無限な永遠な意義を持つ。個人にとつて、永遠性とは力であり、エネルギーであり、勝利である。しかし、フォイエエルバッハは、時間を越えて永遠を見る観客の境涯に身を置くことを否定する。個人は、自己の無常性という不幸に現実的活動を通して打ち勝つことよつて初めて永遠性を獲得しうる、と指摘するのである。「永遠性とは、時間の充実、時間の規定以外の何ものでもなく、時間の充実、時間の規定として時間の中での時間の活動的現実的否認である。」⁽⁸⁾

既述のように、フォイエルバッハは、感覺的現実的な個人の限定された感情を、共同体、歴史へと浄化してしまつたと解釈されることもできる。しかし、個人の死の立場から、人類の歴史の無限性・永遠性を主張するという屈折した表現に、我々は、フォイエルバッハのヘーゲルに対する批判が既に宿されているのを見ることができよう。周知のように、フォイエルバッハは、『ヘーゲル哲学批判のために』において「限定された存在」⁽⁹⁾を哲学の端初として宣言し、ヘーゲル哲学と離反する。それ以後、フォイエルバッハは『死の思索』における想起の歴史の立場から、未来へ投企する歴史の立場へと転回する。このことは、フォイエルバッハのヘーゲル哲学への批判であると同時に、自己批判でもあつたと思う。後期フォイエルバッハは、完結した意識の歴史を概念の永遠であると批判し、カントの「悪無限」⁽¹⁰⁾の立場に共感を寄せる。そして、若きヘーゲルによって軽蔑的に「低き不死」⁽¹¹⁾とみなされていた、世代から世代へと続く子孫の歴史的存続を、積極的に認めるのである。そして、意識の永遠ではなく、生の永遠を主張するのである。しかし、フォイエルバッハにとって子孫とは、血肉を分つ未来の他者という意味を持つだけではなかつたと思う。すなわち、自己の果せなかつた欲求を満たし、自己の活動の成果を理解し、受け継ぐ後世の個人を意味していたと思う。それは、初期フォイエルバッハが、個人の死後に残る他の多くの人々、あるいは人類そのものを信じることによつて、死を克服しようとしたのと異なる。後期フォイエルバッハが例に挙げているように、個人はコペルニクスにとつてのガリレイのような存在がありうることを信じることによつて死に耐えうるかもしれない。我々は、そのような個人と個人の関係を、父にとつての子供、師にとつての弟子、シヨーベンハウエルにとつてのニーチエに見出すことができよう。

ブルックベルクの自然の中で、フォイエルバッハは孤独と戦いながら未来を信じ、自らの著作活動に専念した。

そして『死と不死に関する思索』という自己の著書こそ、真の不死、力強い不死、エネルギーに充ちた不死に関する劇的な定義であると、自負したのである。

初期フォイエルバッハから後期フォイエルバッハへの歴史概念の転回については、今後の研究課題としたい。

注

- (1) Feuerbach, Sämtliche Werke, neu-herausgegeben von Wilhelm Bohn und Friedrich Jodl, Fromman Verlag, zweite Auflage. Bd. I. S. 44. (この全集の略称はF. S. W. とする。)
- (2) *ibid.*, S. 31.
- (3) *ibid.*, S. 69-70.
- (4) 伊達四郎『フォイエルバッハ』弘文堂書房 五三頁
- (5) F. S. W. Bd. I. S. 44.
- (6) *ibid.*, S. 23.
- (7) *ibid.*, S. 18.
- (8) *ibid.*, S. 90.
- (9) F. S. W. Bd. II. S. 179.
- (10) F. S. W. Bd. I. S. 208.
- (11) Hegel, Werke, neu edierte Ausgabe Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel, Suhrkamp Verlag, Bd. I. 288.